

〈論 文〉

赤松小三郎と坂本龍馬の国家構想と その死について

岩 下 哲 典

はじめに

2019年2月23日(土)、第39回上田女子短期大学総合文化学科公開講座(リバティカレッジ)が行われた。「幕末の先覚者・上田藩士 赤松小三郎」の講座として、「赤松小三郎と坂本龍馬の国家構想とその死について」を一般市民向けに御話した。本稿は、その時のメモをもとに、新たに書き下ろしたものである。

まず最初に、国家構想を語るために、そもそも国家とはなにかを確認しておきたい。辞書的に言えば、国家とは、領土、すなわち領海・領空をふくむ領域としての領土を有し、そこに領民がいて、さらに主権者たる、つまり統治権をもった政府組織がある総体をいう。要するに、それらの要素がなければ国家とはいえないのである。ただし、これは、あくまでも近代国家を念頭に置いた概念である。例えば、古代国家・中世国家・近世国家などと言った場合には、はたして、そこに住んでいた人々が、自分たちはそうした近代国家の概念的な「国家」に住んでいる、などとほとんど認識していなかっただろう。あくまでも、現代人からみて、国家の構成要件が、領域・領民・政府であり、その総体が国家なのである。それでも、たとえば古代国家においても、それらの要素を、現代において抽出することは可能であり、概念がなかったからと言って、使えないことはないのである。

ところで、日本の近世から近代にかけて、当時の多くの人士の間で、大いに問題になったのが国家観である。なぜなら、異国船が日本近海に多く渡来し、さらに欧米列強が「開国」を幕府に対して要求してきたことから、日本人の対外観がより顕著な形で問題意識化された。それが、ひいては自国のありかた、「国のかたち」はいかにあるべきか、すなわち国家観を議論しあうことになり、時にはそれが原因で殺し合うよう

なことになった。それが、幕末維新の変革をもたらし、ついには明治維新となったのである。しかし、そうして誕生した維新政府は、次第に強権的な藩閥政治政体と化し、失望した士族や民衆の中には、自由民権運動に身を投じた者もいた。彼らによって運動は高揚したが、運動の先鋭化を恐れた政府は、大日本帝国憲法を制定し、近代天皇制国家を作り上げた。こうして、士族や民衆を抑え込んだ明治政府は、日清・日露の対外戦争を行った。さらには大正・昭和の戦争へと国家は邁進することになった。その結果、1945年の敗戦後、日本国憲法が制定され、理念としての「国のかたち」がより明確になり、政府による暴力が憲法によって規制されることになったのである。

今日、国民にとって国家は、確かに重要である。しかし、あまりにも偏狭になると、「アメリカ第一主義」などと称されるように、極端に流れてしまいがちである。すなわちアジア・太平洋戦争前のブロック経済圏形成を思わせるような自国第一主義が生じており、このままいけば、かつての戦争の時代になりかねない状況にもある。

したがって、今日ほどバランス感覚が重要な時はないといえよう。思うに、歴史学はバランス感覚を磨くものでもあって、偏狭な自国第一主義にならないための、国際人の基礎教養である。したがって歴史学は暗記科目ではない。過去を題材に、現在を、未来を考える学問的営為である。かつ、歴史学では複眼の視座を必要とし重視する。ひとつの思想や宗教にとらわれない学問である。したがって、歴史学は、市民的教養のひとつであり、市民的自由を求めて不断に営まれる知的営為である。上田女子短期大学リベティカレッジにふさわしい学問である。まづもってそのことを強調しておきたい。

それでは、以下、幕末日本の国家構想のきっかけとなった幕末の諸事件を概観し、赤松小三郎の国家構想および坂本龍馬のそれを時系列に語り、その後、赤松と坂本の国家構想の比較、また2人の暗殺をどのように考えるか、御話して行きたいと思う。

1. 近代国家構想に関わる諸事件、ペリー来航から鳥羽伏見の戦いまで

一般に、近代日本の歴史の上で、画期となった出来事として、外圧があげられる。すなわち、19世紀中葉のペリーの来航が外圧の筆頭にくる。最近では、18世紀末～19世紀初頭のラクスマン・レザーノフらロシア使節の来航とそれに対する幕府の対応を近代日本の「開国」論の濫觴ととらえることもある(平川新『「開国」への道』、三谷博『ペリー来航』)。確かにそうした面はあるものの、社会的な情報の拡大とともに、近代国家構想が、多くの識者に意識されたのはペリーの来航であろう。そのペリーの

来航は1年前に予告されていた。その時、既に、近代国家は構想されていた(岩下哲典『幕末日本の情報活動』、同『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』)、というのが、本章の趣旨である。

すなわち、1852年6月(嘉永5年6月、以下同じ)、ペリー来航予告情報が、オランダ商館からもたらされたのである。最初はオランダ別段風説書として、つぎに長崎奉行宛てバタフィア総督公文書が、そしてついに日蘭通商条約草案までもが、オランダから提供された。オランダの意図は、ペリーが日本と通商を含む条約を結ぶ前に、オランダが200年来築いて来た日本での権益を守るため、日蘭で通商条約を締結することだったのである。親切を装いながら、しっかり自国権益を確保すると言う、欧米列強の外交戦略である(小暮実徳『幕末期のオランダ対日外交政策』)。結果的に幕府はそれには乗せられなかったが、老中首席阿部正弘は、浦賀防衛担当の浦賀奉行と会津・彦根・川越・忍の4藩と長崎防衛担当の佐賀・福岡両藩、琉球を実効支配する薩摩藩にのみ情報をリークした。

情報を漏らされた先の諸藩の藩主なかで、福岡藩主黒田斉溥は、薩摩藩主島津斉彬や尾張藩主徳川慶勝の支援のもと、建白書を提出した(岩下『幕末日本の情報活動』)。その建白書には、御三家の幕政参与が提案されていた。これは幕府制度の改革を要求したもので、従来、譜代大名が行っていた幕府政治にいづれ外様雄藩が関与できるように、まず幕政から遠ざけられていた徳川親藩に政治的立場を与えよ、というものであった。また、当時土佐に戻っていた、アメリカから帰国した中浜万次郎を呼び寄せて、海軍を創設せよ、とも提案した。これも実に画期的なことで、漁民に軍事において指導的な立場を与えようとするもので、身分制打破、すなわち「構造改革」とも言えるようなプランである。外様雄藩大名である島津斉彬と親藩雄藩大名である徳川慶勝の支援のもとにこれらの提案がなされたことは、雄藩連合の国家構想、あるいは議会政治の萌芽としてたいへん興味深い。ペリーの来航直前から、日本の近代国家構想が芽生えていたことが見て取れる。

実際、予告時期だけは当たらなかったが、まさに1年後の1853年6月、ペリーが予告通り浦賀に来航した。阿部の幕府は、予告があったために、来航6日後には、アメリカ国書(大統領親書)を久里浜に設置した応接所で受領し、国書公開と意見聴取に踏み切った。レザーノフを半年も待たせた時とは隔世の観がある。阿部の意見聴取に応じた大名、旗本等の上申書は800通以上にのぼった。それらの多くが、中国におけるアヘン戦争に言及し、アメリカの通商要求は、国家的危機であり、決して中国のように

なってはならないとして、今後、将来日本はどのような国家であるべきか、ということが支配者層の最大の関心事となった。ここに「開国か」、「攘夷か」の、国をわける、国家観のせめぎ合いが始まった。ただし、18世紀末から19世紀初頭のロシアの南下によって、すでに幕府内部に開国論が生じていたことは、先にも述べた通りである。

大多数の「攘夷論」に依ることなく、幕府は開国を選択した(今津浩一「ペリー来航対策の大名上申書」)。すなわち、1854年3月、日米条約、すなわち日米和親条約が締結された。幕府は、条約締結をあくまでも「一時の権道」、つまりかりそめの政治であるとして、国内の「攘夷論」を慰撫しようとした。しかし、その後、アメリカ総領事ハリスが下田に着任し、出府を要求した。その要求を容れた幕府の老中首座堀田正睦にハリスは、脅しにも似た演説を行い、ついに1858年7月、日米通商条約を締結することに成功した。同じような条約が、蘭・露・英・仏の都合五か国と結ばれ、安政五か国条約と呼ばれた。外国との通商は、江戸の物価高を呼び起こし、庶民生活を直撃した。それに伴い、皇国日本の国体の危機が叫ばれ、同年8月水戸・長州・薩摩藩などに「戊午の密勅」が下った。幕府以外の単独武家に、幕府を経由しないで朝命(勅命)が下るという前代未聞の政治状況が生じた。ここに水戸藩や長州藩等の尊攘派を弾圧する、大老井伊直弼主導の「安政大獄」が、同年9月、始まった。しかし、暴力的な政治は、1860年3月、桜田門外に井伊が殺害されて終わり、老中久世広周・同安藤信正の政権が発足した。

一方、1861年2月、対馬に入港したロシア軍艦ボサドニク号が、同所の土地を不法に占拠した。これに対して、対馬藩や幕府は有効な手立てをとることが出来ず、かえって攘夷運動が高揚した(岩下『江戸の海外情報ネットワーク』および同「幕末維新史と城郭・城下町・武士」)。1862年、幕府の弱体を憂慮した島津久光は卒兵上洛を果たした。過激派を弾圧する寺田屋事件を起こして輿望を担い、勅使を擁して江戸に降り、幕府に対して、幕政改革を要求した。幕府老中らは、しぶしぶ、松平春嶽を政事総裁職とし、徳川慶喜を将軍後見役に任命し、京都守護職に松平容保をあてた。翌1863年、江戸で結成された尊攘派の浪士組(清川八郎、山岡鉄舟等)は、京都で新選組(近藤勇等)となり、会津藩御預として公武合体派の8月18日クーデターに協力した。新選組は、1864年結成の京都見廻組(佐々木只三郎等)と共に、京都の治安維持に与って力があつた。京都を追い出された長州藩過激派を中心とした尊攘派は、同年7月、禁門の変を起こし、長州藩は朝敵となった。幕府は朝敵長州を打ち払うべく、尾張慶勝を総督に第一次長州戦争を始めようとした。全権委任された慶勝は、実弾戦争することなく、同年12月、長州

三家老の切腹で和睦し、長州藩の軍事力は温存された(第一次長州戦争)。続く、1865年9月、第二次長州戦争の勅許が出て、1866年1月には薩長同盟が、1867年6月には、薩土盟約が結ばれた。同年9月3日、薩摩藩士桐野利秋が赤松小三郎を暗殺した(詳細は後掲関良基『赤松小三郎ともう一つの明治維新』)が、この直後、薩長芸三藩盟約が成立した。10月14日には徳川慶喜はいわゆる「大政奉還」(正確には「政権奉帰」)を行った(「幕末維新史と城郭、城下町武士」)。しかし、慶喜は外交を主軸にして、政権参画に意欲をしめしていた。翌11月15日、龍馬が京都見廻組に暗殺され、12月9日、王政復古の大号令が出され、新政府が発足した。尾張・越前・薩摩・長州・土佐・佐賀ほかに参加したが、慶喜は除外され、かつ政治的・軍事的・経済的基盤さえも朝廷に「奉還」するよう迫られた。1869年1月、慶喜対薩長の鳥羽伏見の戦いが勃発した。新政府内部でも、激烈な多数派工作が行われ、その外側で軍事的衝突が起きたため、かえって結束した。薩長を中心とした新政府軍は、官軍となり、天皇の軍隊を示す「錦旗」が翻った。旗幟を鮮明にせよ、と新政府に迫られた諸藩は、なだれをうって官軍に合流した。慶喜さえも「朝敵」になることを恐れ、降伏した(岩下『江戸無血開城』)。その背景には、確かにペリー来航予告直前から存在した国家観論争があったことがうかがえる。しかし、最早、鳥羽伏見の戦い段階では、論争する余地はなく、薩長の主導する天皇制国家への道か、「朝敵」かの二つが選択肢として残されていたに過ぎない。あとは、それに乗るか、「朝敵」になるか、だったのである。

2. 赤松小三郎の理想的な国家構想

先に述べたように、薩長同盟後、薩土盟約が結ばれ、その直後に、薩摩藩士桐野によって赤松が暗殺され、直後には、薩長芸三藩盟約が成立して、慶喜包囲網が出来上がった。これにより慶喜は、いわゆる「大政奉還」(政権奉帰)を行わざるを得なかった。当時、もっともリベラルな国家構想、すなわち穏健で自由主義的な議会制度に基づく国家構想を唱える赤松の存在は、自分たちを中心とした国家構想を描く薩摩にとっては、大いに邪魔者だったのである。どのくらい、赤松はリベラルだったのか、1867年5月に島津久光に呈上されたとされる「御国事御改正之数件奉申上候口上書」(以下、「慶応三年五月建白書」)を読み解いてみよう(関『赤松小三郎ともう一つの明治維新』に史料掲載)。

まず、第一条を現代語に要約してみる。

朝廷・幕府が一体となり、諸藩が合同した国体を樹立すべきである。そのためには朝廷の権限を拡大し、徳を備え、公平に国事を議論し、全国に命令が行き届くようにして、違反者が無いようにする局を開設することである。天子を助ける宰相は、大君(将軍)、堂上方、諸侯方、旗本のうちから、道理に明るく、実務に通じ、海外の事情を熟知している六人を選んで、一人は大閹老、一人は錢貨出納、一人は外交、一人は海陸軍事、一人は刑法、一人は徴税を担当する。それ以下の諸役人も門閥に関係なく選抜して天子に仕える。これが朝廷である。それとは別に上下議政局を設け、下局は、諸国から数人を選挙で選び、全部で約一三〇人、その三分の一は在京する。上局は堂上・諸侯・旗本から選挙で三〇人を選び、この上下両局ですべての国事を議決し、朝廷に建白し、その許可を受け全国に命令する。ただし朝廷が許可しなかった場合は、議政局に再審議して公正であるとされれば、全国に命じることができる。議政局の選挙では、門閥貴賤に関係なく、道理をわきまえ、私心の無い、人望ある人を公正に選ぶこと。また、これまでの失敗を改め、万国に通用する法を用いて、朝廷役人の人事、外交、財政、富国強兵、人材教育等の法律を制定する。これが国是の基本である。

朝廷と幕府が一体となった国体、行政府たる朝廷と、立法府たる二院制議會、朝廷よりも議会の議決や法律が優先される。いささか理想主義的ではあるが、実に、リベラルな議會制による国家統治論である。さらに、第二条では、人材教育の重要性が説かれ、大小学校や兵学校設置が提案される。三条では、民生重視で、具体的には減税を説く。四条では通貨を安定させること、さらに人口や物資・物流の安定をも提言している。五条では、軍事に関して述べる。すなわち、高性能な武器を採用して、軍人そのものは少ない人員でよく、財政を圧迫しないことを説き、有事には男女とも兵役につくという、リベラルさをみせる。赤松は言及していないが、おそらく女性を実際の戦場で兵士として動員するのではなく、後方支援や病院等での労働を想定していたと思われる。六条では、機械を輸入し、御雇外国人を受け入れての産業振興を説き、七条では、富国強兵のため、国民の体力向上を目指すとして、家畜繁殖と肉食を奨励している。国民の体力向上が富国強兵に必要なこと、教育、産業を重視するのは、明治の富国強兵策となんら変わりが無い。それだけに第一条の、幕府、すなわち慶喜

(大君)も取り込んだ、穏健で自由主義的な議会制度に基づく国家構想は、慶喜を脅威とする西郷隆盛・大久保利通ら薩摩藩急進派にとって、忌避すべき構想だったことは想像に難くない。赤松の国家構想では、諸藩の藩士層の活動領域は、下議政局の構成員にすぎず、限定的であることは特筆に値する。桐野が、「赤松は幕府のスパイだから殺害した」というのはおそらく口実に過ぎない。赤松が生きていては、薩摩主導、藩士主体の国家構想推進には大いに邪魔だったのである。薩摩の急進派は、目的のためなら手段を選ばない、真のマキャベリストであった。ただし、マキャベリストでなければ、明治維新は成し遂げられなかったという側面はある。一方、その下手人は薩摩ではないが、幕府見廻組によって、赤松の2カ月後に暗殺された龍馬の国家構想に関しては、次節で述べる。

3. 坂本龍馬の現実的・強権的国家構想

近年紹介された「慶応三年十月三十日付後藤象二郎宛坂本龍馬書簡(越行の記)」を読み込んでみたい(史料は岩下「幕末維新史と城郭・城下町・武士」)。本史料は、箱包み紙上書に、「松菊公遺愛」とあって木戸孝允の遺品であるとされる。「(坂)本龍馬先生書翰」で、「対嵐山房清玩珍藏」とある。本文の積文からの現代語訳は、以下の通りである。なお、傍線部および(1)(2)は岩下によるものである。また()は岩下の註、[]は史料中の註である。なおまた坂本龍馬については、拙編『坂本龍馬の世界認識』を参照されたい。

十月廿八日、福井に到達した。奏者役の伴圭三郎が自分の旅宿に来た。容堂公の春嶽公宛て御書簡を手渡した。直柔(龍馬の諱)の役名を伴が聞いたので、「海援隊惣官」(海援隊の司令官)であると答えた。

三十日の夜、大目付村田巳三郎が来た。用向は何かと訊ねられた。その他いろいろ聞かれたので、春嶽公に最近の時事を言上したいのだ。その上で御論を拝承したいと言った。およそ明白なる我が日本の国論を海外の国々が聞かないとは残念なことだと言った。さて、それでは今度は私(龍馬)も春嶽公の御国論を拝承したいと心願した。すると、村田が言うことには、春嶽公の出京も来月二日に決まった。事が多端なので、春嶽公に御目にかかることはできないが、前条の御尋の如きは、拙者より春嶽公に申し上げる。そうすれば春嶽公が出京後、

あれこれ手順もあるだろうと思う。ともかく將軍家が政権をお返しにならないとなれば(意味するところは、政権をお返しになったならば)、將軍職も共に御返しにしなければ、御反省といっても、とても天下の人心は折り合わないだろうと、すなわち御国論はここにあると言った。(1) この夜、奏者である伴が来て、春嶽公の容堂公宛て御答書を受け取った。

十一月一日の朝、三岡八郎と松平原太郎が来た。〔但し、三岡に面会の事を、昨夕村田に頼み置いていた。三岡は先年押込になっていたので、他国人との面会は難しいとされていたが、福井藩政府の論議を経て、君側の中老役松平原太郎を差し添えに来ることが出来た。そのため、三岡が来た時、松平を見て、「私は悪党なので、君側より番人がついて来たのだ」と言うと、松平も共に笑ったのである。〕近時の京師の情勢やら、前後のことなど残らず議論した。〔ここに至り語り尽したので、深く御推察下されたい〕三岡が言うには將軍家が、真実に反省しているなら、どうして早くその形を以て、天下に示さないのか、近年来、幕府は失策のみである。その結果、どんな言葉を以てしても、天下の人は、皆、信用しないのである、とした。それから「金銭国用」、すなわち財政のことを論じた。かつて春嶽公が政治総裁職だった時、三岡は自ら幕府勘定所の諸帳面を調べたが、幕府の財政の内実は、ただただ銀座だけが良好で、ほかは厳しく、全く「御気の毒」な状態だ。御聞き置き下さるべきことである。総じて金銀物産等のことを論ずるには、この三岡を置いて他に人はいないと思う。(2) 十一月五日には京都に帰るので、福岡孝弟參政に春嶽公の御答書を渡すつもりだ。以上、大概を申し上げた。 謹言 直柔

後藤先生

近日、中根雪江が、春嶽公の御供で京都に来ると思われ、村田は国元に残ると思われる。家老は、かなりのものが出るともいわれる。再拝、再拝。

本書簡は、龍馬が暗殺される半月前のもので、龍馬が、春嶽宛て容堂書簡をもって福井を訪問した際の報告で、後藤象二郎に宛てたものの控であろう。(1)で、龍馬が報告するには、福井藩では、政権奉歸するなら、將軍職も辞任しなければ、天下の人々が折りあわないと考えている、つまり、あくまでも、將軍を辞めるべきというのが世論だとしており、(2)においても三岡八郎(由利公正)の言質ではあるが、同様に何故

早く将軍を辞めないのかとする。さらに、かつて三岡は幕府財政を帳簿から点検して「気の毒」な状態であることを見破ったことから、三岡をぜひ新政府の財政担当者に迎えたいとの意欲を龍馬は示すのである。

つぎに、この時期に龍馬が新政府の構想を書き留めた「新政府綱領八策」を引用しよう（岩下「幕末維新史と城郭・城下町・武士」および宮地佐一郎『龍馬の手紙』に史料掲載）。

- 第一義 天下有名ノ人材ヲ招致シ、顧問ニ供フ（人材登用・岩下註、以下同じ）
- 第二義 有材ノ諸侯ヲ撰用シ、朝廷ノ官爵ヲ賜ヒ、現今有名無実ノ官ヲ除ク（制度改革）
- 第三義 外国ノ交際ヲ議定ス（外交）
- 第四義 律令ヲ撰シ、新ニ無窮ノ大典ヲ定ム、律令既ニ定レバ、諸侯伯皆此ヲ奉ジテ、部下ヲ率ス（憲法制定）
- 第五義 上下議定所（議会）
- 第六義 海陸軍局（軍事）
- 第七義 親兵（朝廷守護）
- 第八義 皇国今日ノ金銀物価ヲ外国ト平均ス（貿易・財政）

右予メ二三ノ明眼士ト議定シ、諸侯会盟ノ日ヲ待ツテ云々、〇〇公自ラ盟主ト為リ、此ヲ以テ朝廷ニ奉リ、始テ天下万民ニ公布云々、強抗非礼公議ニ違フ者ハ断然征討ス、権門貴族モ貸借スルコトナシ

慶応丁卯十一月

坂本直柔

あくまでも項目だけの国家構想であるが、二院制議会による、龍馬の国家像を垣間見ることができる。もちろん、龍馬の構想は、この史料だけでは十分に伝わらないが、天下に著名な人材の登用と有用な大名によって憲法を制定する、上下二院の議会と海陸軍、親衛隊、経済の安定を提言している。特に、二、三の「明眼士」が議定して、「諸侯」が「会盟」して、「朝廷」に対して報告し、「天下万民」に公布して、その公儀に従わない者は、「権門貴族」と言えども容赦しないのだと赤松よりも、特定勢力、二、三藩の藩士が策定した議案に基づく、かなり強権的な国家を構想している。少数精鋭の策士が主導する国家構想といえよう。

さらに「慶応三年十一月十日付中根雪江宛坂本龍馬書簡」を読み解いてみよう（「幕末

維新史と城郭・城下町・武士』)。これは、包み紙上書きには、下記のように記されている。

越前御藩邸

中根雪江様 才谷樗太郎

御直披

また、包み紙張り紙には、「坂本先生遭難直前之書状ニ而他見ヲ憚ルモノ也」とある。暗殺直前なので、さまざまな憶測をよびかねない為、この様に書かれたのであろう。本文釈文より、現代語訳する。下線部(1)(2)は岩下である。

一筆啓上いたします。この度、越前老侯(春嶽)が、御上京になられるとのこと、千万の兵を得た心中にごぞいます。先生(中根雪江)におかれては諸事御尽力いただいたことと御察を申し上げます。然るに、先頃御直に申し上げ置きました三岡八郎兄の御上京御出仕の一件は、急をようする事ですので、何卒早々御裁可していただきたく存じ奉ります。三岡兄の御上京が一日先になりますと、新国家の御家計御成立が、一日先になってしまいます。(1)ただこの所を専ら御尽力いただけましたら幸いです。誠恐謹言。

十一月十日

龍馬

中根先生

左右

追白 今日、永井玄蕃頭方に参上しましたが、御面会はかないませんでした。談話したい天下の議論が数々ございますので、明日、又、参上しようと思います。ですので、大兄の御同行が叶いましたら、実は大幸だと思います。(2)

再拝

龍馬暗殺5日前の書簡である。(1)のように、龍馬はあくまでも三岡八郎を新政府の財政担当に据えたい考えである。そのため福井藩内での手続き、すなわち三岡の赦免と上京の許可を藩重臣中根に尽力するよう依頼している。(2)によれば、この日、旧幕府若年寄で慶喜側近の旗本永井尚志に面会したかったが、かなわなかったこと、明日面会しようと思うが、中根も同道してほしいことを書いている。龍馬は、貨幣・

物価・物流の安定と、外国貨幣との均衡のため、また、徳川政権が有していた貨幣鑄造権を吸収して、新政府の全権力を安定させるため(岩下「幕末日本における秩序創出の困難さ－坂本龍馬・赤松小三郎の新国家・新秩序構想と暗殺をめぐる」)、是が非でも三岡の新政府入りを実現しなかったのである。龍馬が暗殺されて後の、12月18日、もちろん王政復古後であるが、三岡の新政府出仕が実現した。龍馬は、その金銭的感覚から、新政府の財政問題解決が、政治・外交・軍事等すべての問題解決につながることを知っており、三岡の出仕にこだわったのだと思われる。龍馬の国家構想は、先ず人ありきであった。

4. 赤松構想と坂本構想の比較

ここでは、赤松と龍馬の国家構想の比較を試みる。

まず、赤松のは、理想的なりべラルな議会制度に基づく政治制度に特徴がある。一方、特定の藩等が主導する様な形にはなっていない。どちらかというところ「オールジャパン」を目指しているといつてよいだろう。そして民主的な議会が統治する国家構想である。それを支えるのが、人材教育であり、民生であり、人口・物資・通貨の安定であった。軍事も財政的な負担にならないように配慮し、産業を振興して国力を上向かせ、そのために国民の体力向上を目指して肉食を奨励している。国家から国民個体までの体質改善を想定した。いわば、政治・教育・軍事を改革し、国民の育成、すなわち国民国家形成を説いた。そのために民主的な憲法制定すべきことを主張した。その際の理念は、赤松が、長崎海軍伝習以来、学んで来た万国共通の理念、公平であった。1867年、慶応3年当時、もっとも民主的で進んだ憲法および国家構想と言うことが出来る。

一方、龍馬の関心事は、もっぱら新政府の財政であった。それを福井藩の三岡が担当すればすべて解決できると考えていた。龍馬も、新政府の要は、人材、制度改革、外交、憲法、議会、軍事、朝廷守護、財政に関する憲法制定であった。しかし、特定の二、三の藩の人間が主導するように考えられていた。つまり、どちらかというところ龍馬は現実的な思考のもとに憲法・国家を構想していたように思われる。

この違いは、二人の生き方の違いでもある。赤松は、『矢ごろなかね小銃穀率』や『英国歩兵練法』などの画期的な業績を有する数学者、砲術学者、軍学者であり(上田市立図書館編『赤松小三郎 松平忠厚』)、その在り方や学問から、グランドデザイン

をも描ける人物だった。対して龍馬は、行動的な活動家であり時に政治家である。まとまった業績はほとんどない。活動家や政治家は、現実の行動で仕事を残すしかないのである。これは龍馬の師、勝海舟にも当てはまる(『江戸無血開城』)。

ともかく、赤松と龍馬の指向していたものは、今日から見ると、赤松は理想的、龍馬は現実的で、実は両方を足して二で割ると丁度よいものが出来上がったかもしれないが、薩摩による赤松暗殺と見廻組による龍馬暗殺が、それを歴史から抹殺した。薩摩や見廻組は、この理想と現実の結合が邪魔だったのかもしれない。そこは利害が一致してしまったというべきか。最後に二人の暗殺そのものを考察する。

おわりに 2人の暗殺から、国家を、歴史を、どのように考えるか

赤松暗殺の下手人は、薩摩藩士中村半次郎こと桐野利秋である。桐野は、赤松が幕府のスパイであるとの説を信じ暗殺したとする。赤松は、それだけ大きな存在ではあった。赤松は、薩摩藩士にも同藩邸内で英国軍学を講じていた。自然、薩摩藩内の事情や軍事などの機密にも通じることになったであろう。その点だけとつても、暗殺の名目は十分成り立つ。ただ、それだけでなく、赤松の憲法・国家構想は、薩摩過激派の方向性とは相いれない、リベラルで民主主義的なものであったから、そうした方向性を抹殺するため暗殺されたのである。そうした思想が拡大していくことを薩摩の激派は恐れたともいえる。

一方、龍馬暗殺の下手人は、幕府京都見廻組の旗本佐々木只三郎や同今井信郎らである。彼らは、御尋ね者、つまり犯罪容疑者捕縛の一環として龍馬暗殺を行ったことは事実だろう。しかし、ならば、なぜ、正々堂々と「御用」と踏み込まなかったのか。おそらく、佐々木らには正々堂々と踏み込めない事情があったように思われる。土佐海援隊と同陸援隊の両巨頭龍馬と中岡慎太郎が、護衛もなく、たった2人である、そうした情報を見廻組に漏らした者がいたのだと思われる。見廻組とすれば、最悪の場合、自分たちが手を下したことがわかると、まだこの段階で佐幕的と思われていた土佐藩等から報復を受けるとともに、同藩を一気に薩長側に走らせることになるそれゆえ、龍馬・中岡暗殺を見廻組が行ったことを知られるのは避けたかったのだろう。それゆえ暗殺という方法をとったのだらうと思われる。

ところで、薩摩にとって、龍馬は、旧幕府勢力(永井)との連携や赤松の国家構想の実現に奔走しているようにも思われ、かつ、龍馬の財政構想は、薩摩が輸入を画策し

ている香港造幣局の中古印刷機の購入とそれによる紙幣増刷を阻む要因になりかねない恐れもあった(岩下「幕末日本における秩序創出の困難士」)。土佐の陸援隊長中岡を旧幕府側が、同時に血祭りにあげれば、薩土盟約を結びながら、なかなか腰をあげない土佐藩を討幕に一気に変えることができる。すべてにおいて、龍馬・中岡暗殺は薩摩藩に有利に働いたことは事実である。やはり、龍馬・中岡暗殺に、どうしても薩摩藩黒幕説が頭をもたげるのである。一部には薩摩黒幕説は考慮に値しないという向もあるが「歴史」に「絶対」は禁物である。あらゆる可能性を考慮して、史料に基づいて考察するのが歴史学である。心したい。

さて、状況として、赤松が暗殺された時は、いわゆる「大政奉還」前であった。赤松構想は、あくまでも赤松個人の能力でできあがったもので、薩摩藩は、討幕の大義のための犠牲、すなわち赤松暗殺は甘受するしかないというスタンスだったのである。龍馬が暗殺された時期は、「大政奉還」後で、龍馬の奔走、独走が目立ちはじめ、かつ赤松構想がより現実味を帯び始めるのである。それは、薩摩藩にとってなんとしても避けたかった。

それでは、龍馬が暗殺されて、具体的にはどうなったか。慶喜・旧幕府を取り込んだ「オールジャパン」の新政府設立はほとんど困難になったのである。なぜなら龍馬という、どこにもつながるパイプ役を失ったからである。こうして、薩摩藩を中心とした討幕派は王政復古クーデタを行い、慶喜を排除し、鳥羽伏見戦争で慶喜に錦旗を突き付けて、そのやる気を失わせ、徳川親藩である尾張藩に勤王誘引を行わせた。これにより、東海・信濃・上野の佐幕的な大名や旗本は勤王に寝返った。こうして龍馬遭難後は、すべては、薩摩藩に有利に推移していった。例えば、裸城同然の江戸城は、無血開城せざるを得なかった。その交渉は、江戸会談の前に、静岡での旗本山岡鉄舟と西郷隆盛会談の交渉で「江戸無血開城」が決まったことは既に周知の事実である(『江戸無血開城』)。さらに、会津藩救済のため奥羽越列藩同盟ができたが、後に、これはあまりにも民主的な運営がすぎて崩壊した。長岡戦争前には、譜代長岡藩は家老河合継之助が独立・中立を唱えたが、それを新政府軍は踏み潰した。会津戦争では、新政府は、徳川家門大名の籠城戦を近代兵器で圧倒し、多くの犠牲者が出た。庄内戦争では、譜代庄内藩は負けなしだったが、多勢に無勢で、やがて新政府の軍門に下った。最後に残った家門・譜代大名、旧幕臣らは蝦夷島政府を箱館に樹立したが、戦争に敗れ、新政府は、琉球を除く全国土を軍事的に掌握したのである。そして、1872年、明治

4年の廃藩置県で旧大名はすべて淘汰され、琉球以外の全日本は、王土に復した。1873年、明治6年政変が勃発、西郷らが下野していった。その西郷も1877年、西南戦争で滅亡した。新政府の勝利は、日本の軍事国家化の始まりだった。その上で、1879年、琉球王国は「処分」されて、強圧的に沖縄県が設置された。また、1899年、北海道旧土人保護法によってアイヌ民族は強制的に日本国民に編入されたのである。かくして、幻想としての単一民族国家「日本」が生み出されたのである。

概して、軍事国家になった瞬間、侵略国家たらざるを得ないのは、歴史の常道である。なぜなら、軍人のモチベーションは、恩賞すなわち土地、領土だからである。例えば、織田信長政権は、信長が本能寺の変で倒れ、豊臣秀吉が後継政権を荷なった。軍事国家の主人秀吉は、朝鮮侵略たる朝鮮出兵を無理をしてでも行わざるを得なかった。そうしなければ軍とそれに依拠する国家を維持することができないからである。それを見ていた徳川家康は、軍事国家でありながら侵略国家にはしなかったのである。以来、260年以上徳川政権は存続した。これは世界史上、特異な非侵略的(自衛的)軍事国家である。260年の間、軍事国家でありながら侵略戦争をせず、大規模な国内戦争も島原の乱以外になく、軍人たる武士は、実は外圧にはすこぶる弱い存在になっていた。その上、容赦のない西洋列強の外圧が強まる。そのなかで、国をどうするか。国家観のせめぎ合いが始まった。時に、暗殺までもが横行する。「人殺しが平気で出来ること」、これが権力の源泉になったのが、幕末維新であった。その評価は、150年後の私たちに突き付けられた「匕首」でもある。どのように評価すべきか。

なおまた、昨年2018年は、薩長土肥では「明治維新150年」であったが、東北や新潟では「戊辰戦争150年」であった。明治維新政府の中心となった西南地域は「明治維新」をすんなり受け入れたが、苛烈な戦場となった北越・東北地方の人々はおそろしく受け入れがたい心性を有していよう。ともかく、150年、5世代前の日本は、おそろしく人命がないがしろにされた、時代であったことは記憶したい。そうした犠牲のもとに成り立った「明治維新」「明治政府」「明治時代」であったことを、以て銘すべき、である。

守るべき国民を暗殺して出来上がった政府は、はたして正当な国家と言えるのかどうか、歴史の法廷で厳しく審理されねばならないのである。では、判決はいかに。残念ながら、既に紙面が尽きたようである。

【引用文献(編著者50音順)】

今津浩一「ペリー来航対策の大名上申書」『開国史研究』第19号、2019年

岩下哲典『幕末日本の情報活動』雄山閣、2000年初版、2016年普及版

同『江戸の海外情報ネットワーク』吉川弘文館、2006年

同『龍馬の世界認識』藤原書店、2010年

同「幕末維新史と城郭・城下町・武士」『城下町と日本人の心性』岩田書院、2016年

同「幕末日本における秩序創出の困難さー坂本龍馬・赤松小三郎の新国家・新秩序構想と暗殺をめぐって」『東アジアの秩序を考える』春風社、2017年

同『江戸無血開城』吉川弘文館、2018年

上田市立図書館編・刊『赤松小三郎 松平忠厚』2000年

小暮実徳『幕末期のオランダ対日外交政策』彩流社、2015年

関良基『赤松小三郎ともう一つの明治維新』作品社、2016年

平川新『「開国」への道』小学館、2008年

三谷博『ペリー来航』吉川弘文館、2003年

宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫、2003年

【付記】

なお、赤松に関しては、以下も参照した。あわせて参照されたい。

青山忠正「慶応三年一二月九日の政変」明治維新史学会編『講座明治維新』二、幕末政治と社会運動、有志舎、2011年

赤松小三郎顕彰会編・刊『重訂赤松小三郎実録』2013年

柴崎新一『赤松小三郎先生 現代誤訳版』赤松小三郎顕彰会、2016年

関良基「江戸時代末期の暗殺と明治の弾圧の言説分析」岩下他『東アジアの弾圧・抑圧を考える』春風社、2019年

竹内力雄『山本覚馬建白(管見)』(私家版)2014年

宮地正人『地域の視座から通史を撃て!』校倉書房、2016年

また、上田藩については、青木歳幸『シリーズ藩物語 上田藩』現代書館、2011年を、徳川慶喜については、岩下哲典『徳川慶喜その人と時代』岩田書院、1999年および小林哲也「徳川慶喜」『歴史リアル 敗者の明治維新』洋泉社、2018年を参照のこと。

ところで本稿を贈稿後、栗原智久『桐野利秋日記』P H P 研究所、2004年に収録されている赤松小三郎暗殺後の「罪状如左之」(斬姦状)に「元信州上田藩赤松小三郎」とあるのを見て思った所感を述べておく。

「元」とあることから、作成者で、暗殺者である薩摩藩士桐野の認識では、赤松は、上田藩士ではないということである。では薩摩藩士なのか、そうではあるなら、赤松暗殺は仲間内の粛清ということになる。もしかしたら、上田藩による報復を恐れたのかもかもしれない。さらに追求すべきかと思われる。

岩下哲典(いわした・てつ)略歴 【歴史学 日本史 近世・近代史】

1962年(昭和37)年 長野県塩尻市北小野(「たのめの里」)に生まれる。

1994年(平成6)年 青山学院大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程単位修得。

1997年(平成9)年 明海大学経済学部専任講師(のち助教授)。

2001年(平成13)年 博士(青山学院大学、歴史学)。

2004年(平成16)年 明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部開設実施委員。

2005年(平成17)年 明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部教授

2016年(平成28)年 東洋大学文学部教授

現在、東洋大学文学部史学科教授

(大学院文学研究科史学専攻博士後期課程論文指導担当教授兼任)

[職歴等]財団法人徳川黎明会総務部学芸員、(古河市)鷹見家資料学術調査団調査員、東京都埋蔵文化財センター丸の内分室(土佐藩・阿波藩上屋敷跡発掘)文献調査員、新修名古屋市史第三部会執筆・調査員、国立歴史民俗博物館客員助教授、津山洋学資料館展示構想策定委員、浦安市文化財審議会副委員長、国際日本文化研究センター共同研究員など歴任。他に青山学院大学・聖徳大学・早稲田大学・東京女子大学等の非常勤講師を歴任。

[主な著作(最近の単行本から、除論文等。なおゴチックは本稿と関連が深い)]

2019年『東アジアの弾圧・抑圧を考える』(共著、春風社)。

2018年『普及版幕末日本の情報活動』(雄山閣)、『江戸無血開城』(吉川弘文館)。2017年『幕末維新の古文書』(監修、柏書房)、『病とむきあう江戸時代』(北樹出版)、『津山藩』(現代書館)、『地域から考える世界史』(共編、勉誠出版)、『東アジアの秩序を考える』(共著、春風社)。

2016年『城下町と日本人の心性』(共編著、岩田書院)。2014年『解説 大槻磐溪編「金海奇観」と一九世紀の日本』(雄松堂書店)、『東アジアのボーダーを考える』(共編著、右文書院)。2012年

『高邁なる幕臣 高橋泥舟』(編著、教育評論社)。2011年『レンズが撮えた幕末明治日本紀行』(編、山川出版社)、『日本のインテリジェンス』(右文書院)、『江戸時代来日外国人人名辞典』(編、東京堂出版)、『江戸将軍が見た地球』(メディアファクトリー新書)、『レンズが撮えた幕末の日本』(共編、山川出版社)。2010年『坂本龍馬の世界認識』(共編、藤原書店)。2008年『[改訂増補版]幕末日本の情報活動』(雄山閣出版)。2006年『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』(洋泉社)、『江戸の海外情ネットワーク』(吉川弘文館)。2000年『徳川慶喜—その人と時代』(編著、岩田書院)、『江戸情報論』(北樹出版)、『幕末日本の情報活動』(雄山閣出版)。1999年『江戸のナポレオン伝説』(中央公論新社)。1998年『権力者と江戸のくすり』(北樹出版)。1997年『近世日本の海外情報』(岩田書院、共編)。